



スロイス肖像写真

「スロイス及門弟写真」①(096.0-542①)

舎密学卷之一
和蘭陸軍第一等醫官私魯以斯氏口授
スロイス
藤本清辰筆記

通論
夫レ二三箇ノ体結合シ以テ屢々一箇ノ新体ヲ為ス又一
個ノ体分離シ以テ二三箇ノ新体ヲ為ス以テ如キヲ舎密
現象ト名リ其現象ヲ論スル学ヲ舎密学ト稱ス仅令ハ硫

「舎密学」(096.5-118)

化学遺産認定記念

藤本文庫展

玉川図書館近世史料館

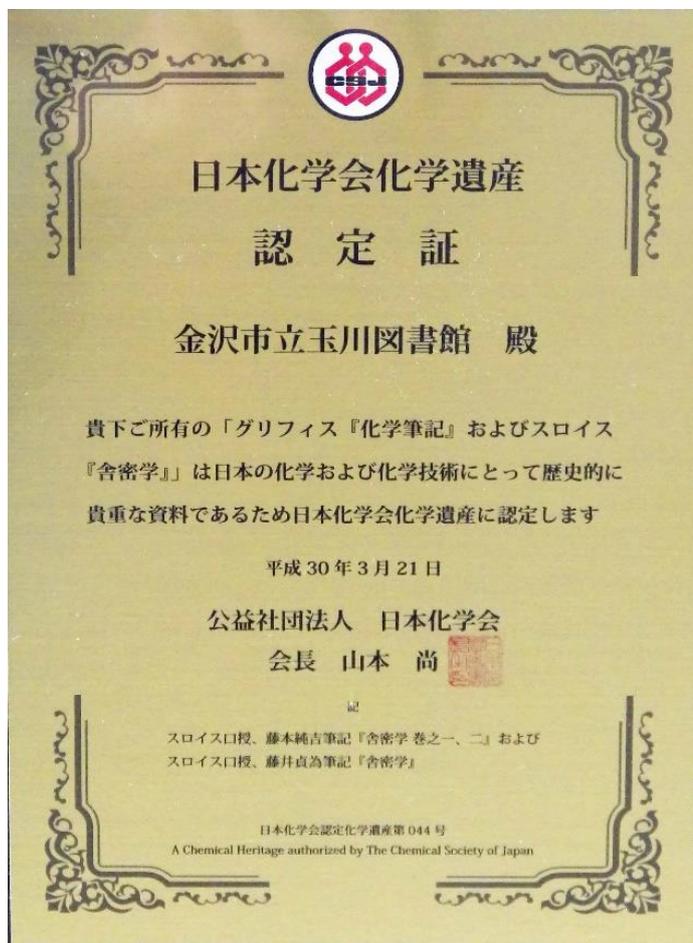
はじめに

平成30年3月21日公益財団法人日本化学会は認定化学遺産第044号として「グリフィス『化学筆記』およびスロイス『舎密学』」を化学遺産に認定しました。グリフィス『化学筆記』は福井市立郷土歴史博物館所蔵史料で、スロイス『舎密学』は当近世史料館所蔵史料です。

当館所蔵の「舎密学」は、オランダ軍医ピーター・スロイスが明治4年(1871)頃に金沢医学館で行った講義を当時の学生が筆記しまとめた講義録です。「舎密」学はオランダ語で「化学」を意味する「Chemie(ケミ)」に漢字を当てたものです。宇田川榕庵が天保8年(1837)西洋化学を紹介した書「舎密開宗」でこの漢字を使用しています。

このスロイス講義録を検討した板垣英治氏(金沢大学名誉教授)は、スロイスの化学講義はアボガドの分子説に基づいた当時西洋最新の化学が、世界に遅れることなく金沢で教えられていたことを指摘しました。これまでの日本の化学史における最初の化学講義は明治2・3年のハラタマヤリッテルの講義でした。しかし、彼らの講義は来日時期の関係で西洋最新の化学ではありませんでした。1860年代は西洋化学が大きな変革の時期であったため、その僅か1年後にスロイスやグリフィスが現在の化学にも繋がる最新の化学講義をしていたのです。そのことが日本化学史における重要事項と認められ、そのことを示す講義録が化学遺産に認定されたのです。

ところで、当館には二種類のスロイス講義録を所蔵しています。一つは藤本純吉が筆記したもの、もう一つは藤井貞為が筆記したものです。藤本純吉は、代々加賀藩御抱えの観世流太鼓御手役者の家系、藤井貞為は加賀藩御抱え医師の家系でした。



両家とも、藩政期は家職・家芸があり、その伝統を受け継いでいました。明治期に入り藤本純吉・藤井貞為は金沢医学館第一期生として西洋医学を学びスロイスの講義を受けたのです。

当館には藤本純吉が昭和8年(1933)に寄贈した「藤本文庫」(約4300点)が所蔵されています。藤本家としての能楽関係の史料や後に医者として活躍した純吉の医学関係史料が中心ですが、書道・茶道・文学・歌学・国学など幅広い史料が含まれています。

本展では、二人が筆記した「舎密学」の他、藤本文庫の能楽・医学関係の史料を中心に展示し、藩政期から明治期にかけて金沢における伝統と西洋文化の受容の一端を感じて頂けたらと思います。

※本展示における史料の番号が「096」から始まるものは藤本文庫の史料です。

初代 長右衛門 紀州郷士 寛永9年没
2代 長右衛門 江戸浪人 延宝4年没
3代 太左衛門 正徳4年没
4代 太左衛門正敷 養子 明和9年没
5代 長右衛門清方 養子 文化4年没
6代 太左衛門 文化8年没
7代 太左衛門 養子 天保6年没
8代 太左衛門清貞 養子 嘉永6年没
9代 長右衛門清直 養子 明治22年没
10代 太次郎清辰 純吉 養子 昭和13年没

太鼓御手役者藤本家

「先祖由緒書」によると、藤本家の初代は紀州郷士、2代目が江戸に出て浪人でしたが、その室が、4代藩主光高の頃加賀藩江戸屋敷の広式に上がり、その縁で3代太左衛門は寛永19年(1642)3人扶持で召し出され、後寛永20年生まれの綱紀部屋附となります。その後光高の命により観世与左衛門に弟子入りし太鼓を学びます。与左衛門は、天正頃の太鼓の達人であった観世国広の3代目で、太鼓は似我流とも称し公儀(徳川家)の太鼓役者です。

3代太左衛門は独身であったため、4代太左衛門正敷は公儀御部屋役者清水家からの養子です。正敷には4人の男子がいましたが、嫡男は早世、三男は別家笛役者となり、四男は清水家の養子となっていました。次男吉三郎は太鼓の技量が不足か一旦は嫡子となるもの「不行状」として廃嫡となります。結局清水家の次男が養子となり5代目となります。

4・5代太左衛門も太鼓役者として加賀藩に仕え、藩主の御供で何度か金沢に来ています。5代清方は寛政11年(1799)太左衛門から長右衛門に名を改め、寛政12年に金沢に引っ越したのです。その後6~8代太左衛門と続き、9代長右衛門清直の時に明治維新を迎えます。

9代清直には男子がなく、安政3年から内弟子であった小泉弥太郎次男三四郎が、その太鼓の技量が藤本家を継承できると認められ、清直の養子となり太次郎清辰を名乗りました。この太次郎清辰が、明治維新後医者を目指し、スロイス講義録「舎密学」を筆記した藤本純吉です。

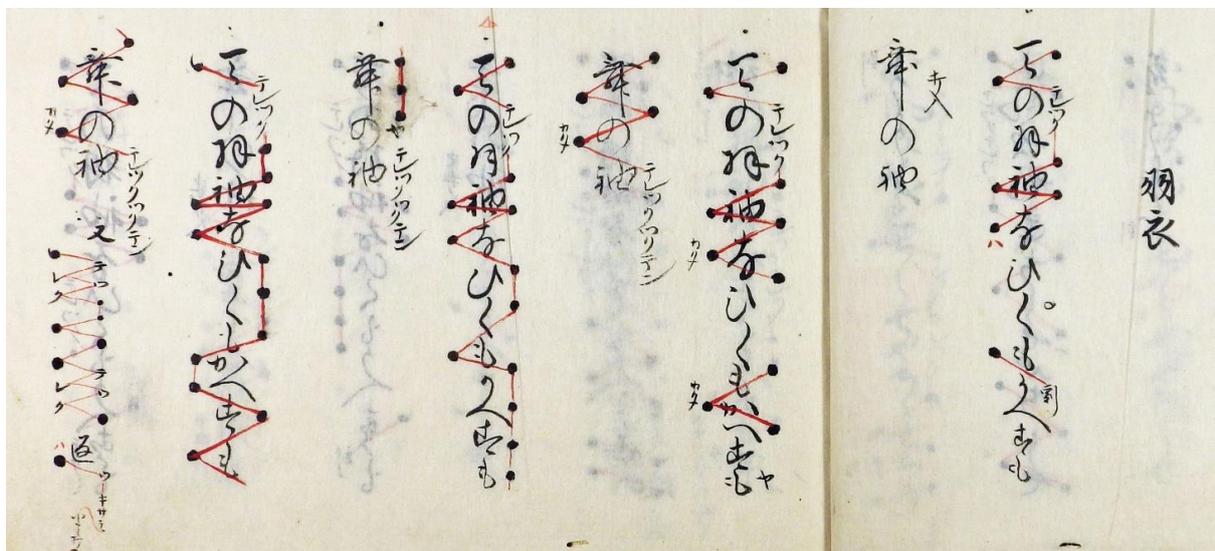
一祖父
 三三代 友平をねん
 右の爲に幼少の時長命と申す頃若の間
 三三郎と申す後長命と相改り長命九歳の時
 陽廣院様御代寛永十九年四月廿五日出立扶持
 佛位名は下無しと後
 松雲院様 御神屋佛附花 御知少し御時
 右側 三三郎 右に長命一歳之時
 陽廣院様 御代出立観世与左衛門の御子と仕候
 此後長命太鼓藝仕一日と 御側相勤一日と互屋敷



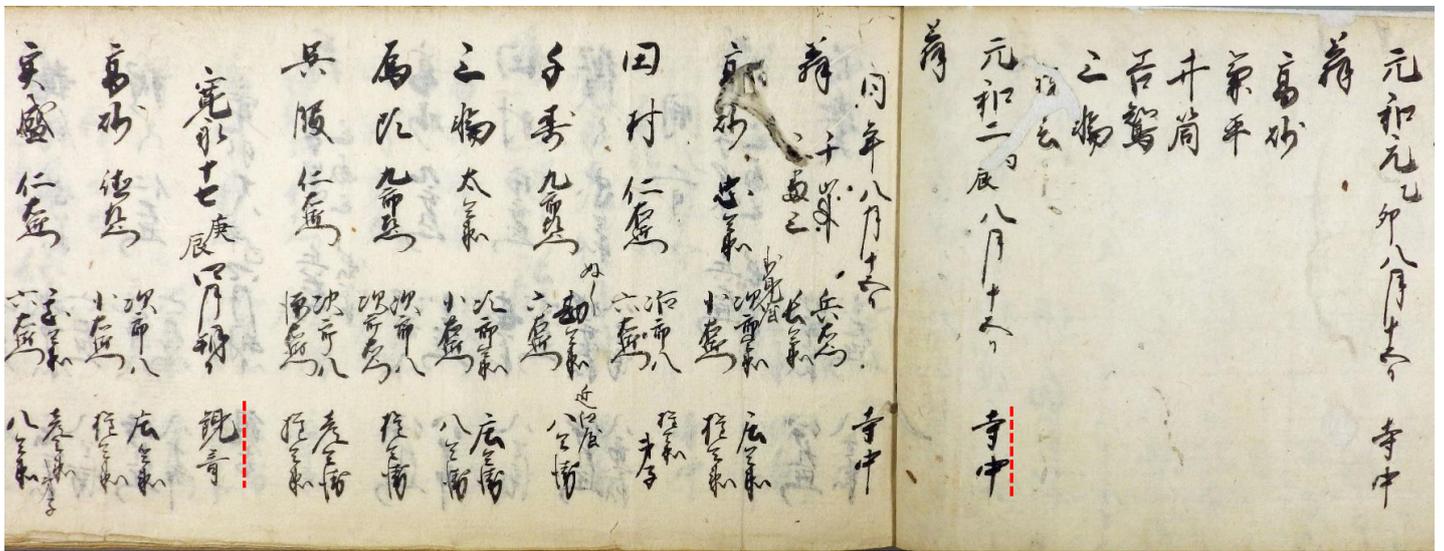
「先祖由緒書」(096.0-496)

「羽衣」を描いた場面 左後に太鼓役者が描かれています。

「能楽図繪」(28.3-66①)



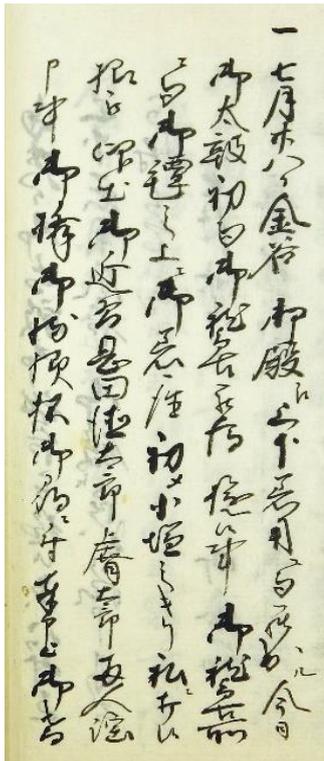
「太鼓手附」(096.7-176)



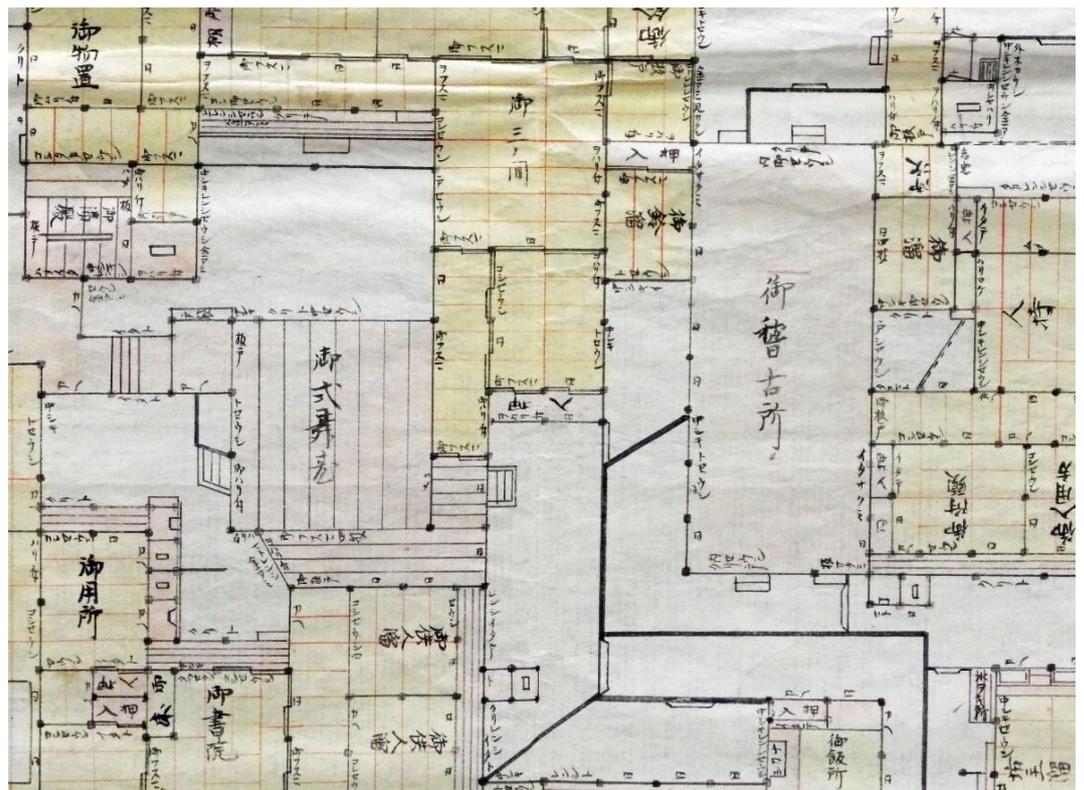
「加賀藩御能に関する日記及番組」①(096.0-551①)

全26冊之内の1冊目。表紙には「慶長九甲辰八月ヨリ／両御神事古今御番組／藤本稽古館」と記されています。「両神事」は「寺中」（大野湊神社）と「観音」（卯辰観音院）で行われた神事能の事です。大野湊神社の神事能は慶長9年(1604)から、卯辰観音院は寛永14年(1637)から始まったと記しています。何れも宝暦8年(1758)まで何年であるかの記載があることから、4代太左衛門正敷が調べて書き残したものと考えられます。

その他25冊を含め、その後も藤本家代々により書き続けられたこれらの史料により、加賀藩における能番組などの詳細が確認できます。



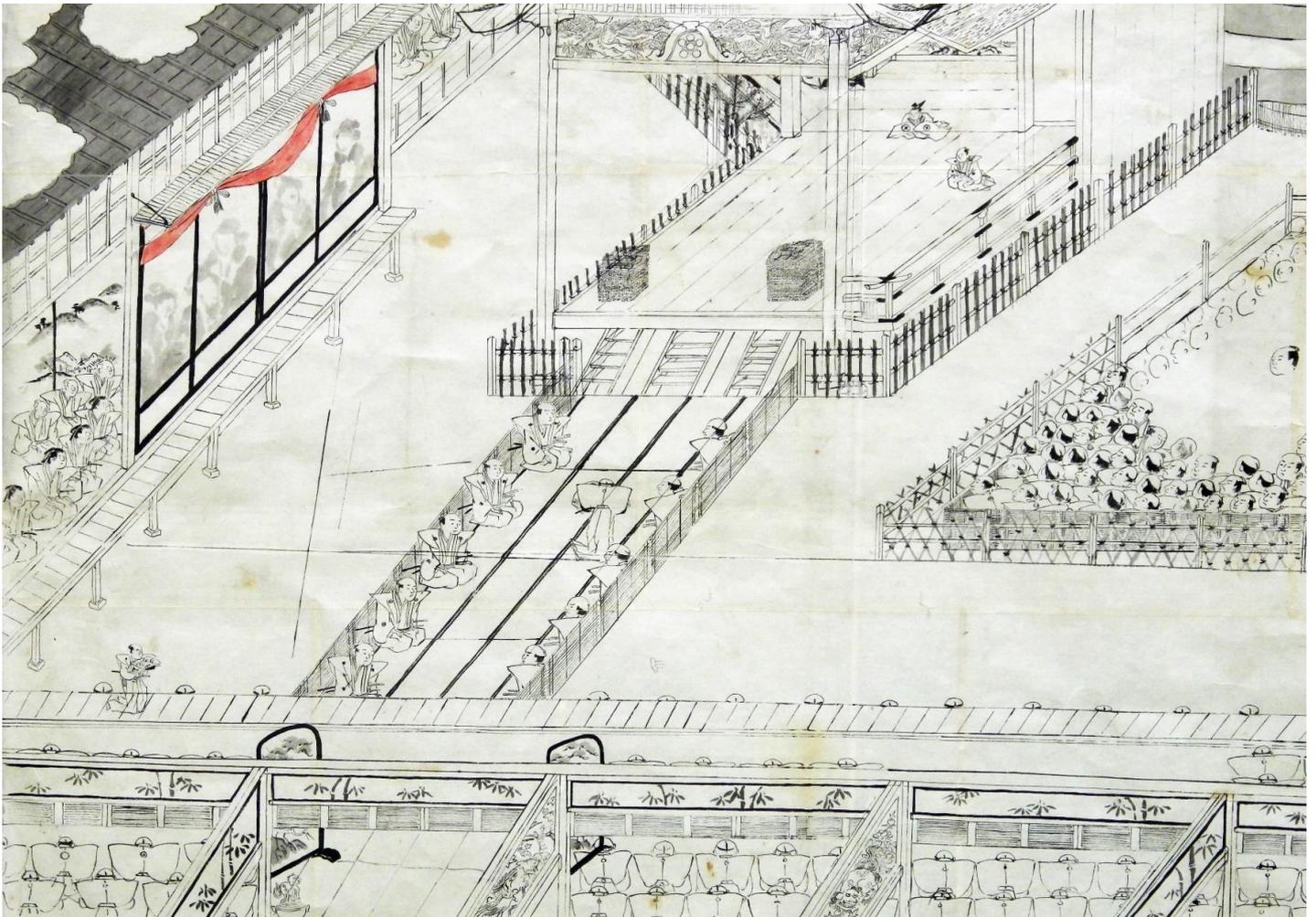
「筑前守様御太鼓御稽古御用一件」
(096.0-442)



「松之御殿図」(16.18-59)

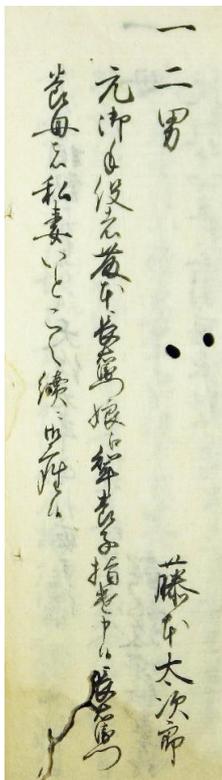
嘉永4年(1851)5月、8代太左衛門清貞は筑前守(後の14代藩主慶寧)の太鼓稽古御用を命ぜられます。7月11日に誓詞(起請文)を提出し、7月15日には金谷御殿で太鼓2挺の音調べを行ったところ、当日の松之御殿御能で慶寧相手に高砂の太鼓を演ずるように命ぜられています。そして7月28日には金谷御殿に上下着用して「御稽古所」で初稽古をしています。

「松之御殿」は、12代藩主齊広の正室真龍院が、齊広の没後天保9年(1838)に江戸から金沢に移り、真龍院の居所が「松之御殿」と呼ばれました。上の「松之御殿図」を見る限り、金谷御殿の中に松之御殿を造作したようです。同図では左側の「御式舞臺」の下方に松之御殿の表門があり、右側の「御稽古所」の下方に金谷御殿の金谷御殿門が描かれています。



「観能之図」(096.0-152)

どこの能舞台かわかりませんが、舞台前面上部の欄間部分には剣梅鉢が描かれています。



「先祖由緒并
一類附帳」
(16.31-65)
小泉弥太郎

藤本純吉

太鼓手役者藤本家の10代純吉は小泉家からの養子でした。小泉弥太郎の明治3年(1870)の由緒帳には、弥太郎の次男太次郎が9代藤本長右衛門(清直)娘の躰養子で、弥太郎の妻と長右衛門の養母が従姉妹であることが記されています。小泉家は前田美作家(18000石)の家臣で弥太郎とその父弥兵衛ともに右筆を勤めていました。

「藤本純吉伝」(096.0-491)によれば、嘉永3年(1850)生まれ幼名三四郎、安政3年(1856)7歳で藤本家の内弟子となり、元治元年(1864)藤本清直の娘の躰養子となり太次郎(清辰)と改名し、明治2年医師黒川自然(良安)に師事した後純吉と改めたとしています。但し、幼名「三四郎」は小泉家での名ではなく、安政3年以降に改名した藤本家の幼名と考えられます。藤本家には3代太左衛門および4代太左衛門の嫡男が三四郎を名乗っています。

清直の長女早は安政6年生まれ、6歳で純吉(15歳)の妻となったこととなります。早は明治11年に亡くなり、純吉は清直の二女さた(明治3年生)と再婚します。いずれにしても純吉は、藤本家において三四郎を名乗り、6歳の長女の躰養子となり太次郎と改めるなど、太鼓御手役者の家を継ぐ技量が十分に見込まれた人物でした。

太鼓のみならず多芸多才で、書は幼少より実父より習い、剣術・抜刀も修業し、漢学は今枝家の医者出口亮(立安 養父清直の弟)から、国学・歌学は安木田頼方、後に高橋富兄から学んでいます。そして明治2年黒川自然に師事し医者を目指しました。

明治4年に金沢医学館に入学した純吉は、医学館教師でオランダ陸軍医スロイスから舎密学等医学関係諸学を学んだのです。



「加賀藩御能に関する日記及番組」(096.0-551㉔)

「金沢城絵図」(096.0-277)

左は、藤本純吉が11歳の時に書いた帳面の表書、右は18歳の時写した金沢城図です。書や絵画の技量も優れていたことが窺われます。

ヨリ来會シ西曆一千八百六十九年九月廿二日(我明治二年)アムステルダム府ニ於テ同國陸軍一等軍醫(相佐)ベイ、アスロイス氏ヲ金沢藩へ雇入レ一箇年後ニ赴任日本到着ノ日ヨリ起算シ三箇年ノ期限トシ日本加賀国金沢ニ至レハ醫學学校ニ於テ醫學生徒ヲ教授シ並ニ病院内外患者ノ治療ニ従事シ月給ハ洋銀四百弗ト定メ日本國ノ一港へ到着ノ日ヨリ給與シ旅行仕度金トシテ月給ニヶ月分ヲ前借セシメ旅費トシテ片道洋銀七百弗ヲ拂ヒ

「伍堂卓爾一世紀事」(16.62-126)

スロイス(私魯以斯)

オランダ陸軍第一等医官スロイスは、1833年生まれ、1849年に陸軍軍医学校に入学、1854年オランダ東インド陸軍に入隊し、後に一等軍医となりました。

明治2年(1869)金沢藩は、蘭学医伍堂春閣(卓爾)を渡欧の通訳として随行させ、アムステルダムで医学教師の招聘交渉を行いました。そしてオランダ軍医スロイスと3年期限、月給洋銀400ドル等の条件で金沢の医学教育に合意したのです。

伍堂卓爾は、本多家(五万石)の手医師伍堂又晋齋の子ですが、帰国後明治3年2月には金沢医学館副教師を命ぜられました。4月にはスロイスの迎えや通訳のため長崎へ向かい、その後はスロイスの通訳を勤めています。

一方スロイスは明治4年3月金沢に到着、金沢医学館などで「舎密学」の他「動物学」・「健康学」・「原病学通論」・「外科手術学」等を教え、明治7年、3年の期限の後金沢を去り帰国、1877年退役、1913年79歳で亡くなりました。



金沢医学館教師集合写真

「スロイス及門弟写真」②(096.0-542②)

後列向かって左から、**伍堂卓爾**・松田壬作・馬嶋健吉・横井三柳・伏田幹
 前列向かって左から、津田淳三・太田美農里・スロイス・田中信五

藤井貞為と藤本純吉

藤井貞為は、明治6年(1873)の由緒帳に33歳とあることから天保9年(1838)生まれで、嘉永3年(1850)生まれの純吉より12歳年長です。

藤井家については、由緒帳(「藤井貞為」と「藤井全貞」)によると大和国郡山の町医者藤井貞三から確認できます。次代貞三は寛永年中に江戸に出て医業を勤め、その2代後の貞三が享保12年(1727)から加賀藩に出入りをはじめ、元文6年(1741)から20人扶持で江戸で藩医となっています。その後貞三永暢、貞元永明、全貞保祐と続き、全貞の時、明治元年2月金沢居住を命ぜられます。「三月景德院様診御用」とあることから13代齊泰正室溶姫の金沢移住に伴って金沢に来た藩医といえます。

貞為有則は、江戸の町医者土井景斎の弟で、慶応3年(1867)全貞二女の婿養子となり、養父と共に金沢へ移住します。明治元年の北越戦争では医者として従軍し、明治6年に全貞が隠居し家督を相続しています。

貞為は既に医者でしたが、蘭学医ではなかったため、明治4年金沢医学館で、30歳を過ぎてから西洋医学を学ぶことにしたのです。

命ハ
 願之通養父保祐隱居被 命私家督與相違相續被
 被 仰舟為宦軍出陣仕同十二月歸陣仕同六年九月五日
 明治元年越後筋戦争之砌隊長三段崎基正手合附屬
 八月前田慶寧代養父保祐娘と聲養子願之通被舟
 私儀實者東京醫者土井景齋弟也此慶應三年
 給禄高三拾六石五斗式升五合
 本國武藏出生三拾三年
 藤井貞為
 加賀國第拾四區觀音町借宅

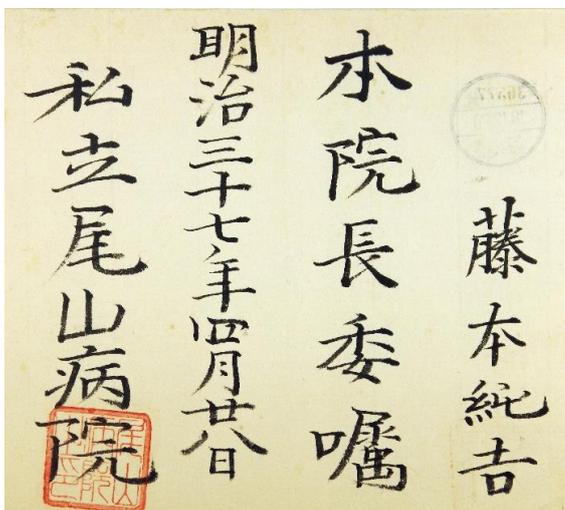
「先祖由緒并一類附帳」(16.31-65) 藤井貞為



金沢医学館(一期生)集合写真 「スロイス及門弟写真」③(096.0-542③)

後列向かって左から、三沢敬吉・須賀忠愛・宮北憲・上出達三・藤本純吉
前列向かって左から、藤井貞為・上杉寛二・稲坂謙吉・不破鎖吉

藤井貞為・藤本純吉は共にスロイス及びホルトルマンに西洋医学を学び、明治8年(1875)7月貞為は金沢病院当直医兼金沢医学所二等助教となり、純吉は若かったためか同月金沢病院副直医(十等医)となります。その後貞為は明治9年10月富山病院当直医となり、明治12年11月富山病院長心得、明治16年7月富山病院高岡分病院長となります。一方純吉は明治10年4月福井病院当直医並びに医学所教員となり、同年10月金沢病院当直医となり金沢へ戻り、明治11年9月金沢医学所助教兼務となっています。その後明治13年12月富山医学所教諭兼富山病院当直医となりますが、明治14年2月依願解任により金沢病院当直医に戻っています。江戸から金沢に移ってきた藤井は金沢への執着は無かったのか、明治28年高岡で亡くなっています。



「藤本純吉辞令并履歴書」(096.0-486①)

藤井貞為の長男寿松(明治4年生)も東京帝国大学医科大学を出て医者となります。貞為が残した多くの講義録は引き継がれ、角印「DRMED/FUJII/JUSHO」が押されています。また、純吉の長男喜久雄(明治21年生)は東京帝国大学工科大学造船科を出て海軍へ入り、海軍造船少将となりましたが、昭和9年(1934)の友鶴事件(軍艦沈没事件)の責を負い、翌年に亡くなっています。

なお、藤本純吉は明治17年12月金沢病院を依願退職しています。翌明治18年に田中信吾・不破鎖吉等と共に金沢市博労町に私立尾山病院を開設し、明治37年には院長となっています。

医学の傍ら、太鼓役者を続け、明治43年には北国筋流儀芸道取締を務め、国学では明治41年大日本歌道奨励会特別会員に推薦されるなど多才を極め、昭和13年に亡くなりました。